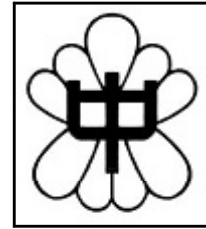


- 1 派遣期日 平成28年10月5日(木)
- 2 研修先 港区立赤坂中学校
東京都港区赤坂9丁目2-3
<http://akasaka-js.minato-tky.ed.jp/>



【港区立赤坂中学校 校章】

3 研修内容

本校の英語科の研究主題は、「一人一人の生徒を伸ばす評価の充実を図り、4技能を総合的に活用するコミュニケーション能力の基礎を養う指導の在り方」である。生徒は、英単語を覚えたり、英文を日本語訳したりすることについては積極的に参加するが、英文を声に出して読んだり、自己表現をしたりすることには消極的である。そこで、インタラクティブフォーラムの要素を帯活動として取り入れるなど、活動の工夫を行うことによって対話を促す環境をつくった。そして積極的に自己表現ができるようワークシートなどを工夫した。小グループの中で発表することで、理解を深めながら英語でコミュニケーションする喜びを味わわせることができるのではないかと考えたからである。港区立赤坂中学校の北原延晃先生の授業では発音指導、音読指導、語彙指導、そしてパフォーマンス指導を柱としていた。本校の研究主題の解決に向け、4技能の指導を通して子どもたちに学習意欲を起こさせ、努力ができるようにと日々実践をしている先生の取組を学びたいと考え、選定した。

北原延晃先生は、自ら開発した理論と実践をデータで裏付けた「北原メソッド」という指導法で知られており、その効果の高さから多くの教諭が先生のもとへ研修に訪れている。北原メソッドの授業が成功している秘訣は「適切な時期に」「適切な教材を使って」「適切な方法で」という3つの「適切」を守っているからだ、と著書『英語授業の「幹」をつくる本』で述べている。今回は全年生の授業を参観し、4技能の指導がその「適切」によってどのように変化していくのかを見てきた。

まず、1学年の授業では、普通学級20名+特別支援学級3名の合計23名で、理解・作業の遅い生徒も数名いるがペアシステムに助けられながら学習をしている。全ての学年でペアシステムを取り入れており、比較的英語が得意な人を「リーダー」、比較的英語が苦手な人を「パートナー」と呼びペアを組ませ、生徒同士の練習や学習に多く取り組ませている。1年生は音読に力を入れて指導している。生徒も宿題として音読に積極的に取り組んでおり、1ページにつき50回以上読む生徒が全体の7～8割にも及ぶ。学習の流れは、

(1)(帯活動) Song、→(2)(帯活動) WPM、→(3)(展開) 教科書の Unit 6 Part1 ①黙読 ②新出単語の導入 ③本文の内容理解・解説 ③音読 のようになる。

教卓の両脇に大きなテレビモニターがあり、ミュージックビデオが再生され、それを歌詞カードを見ながら歌い始める。ここでの歌は楽しい雰囲気させるためのものである。また意味などが分からなくてもメロディーやリズムの心地よさから、自然に歌詞を覚えてしまうなどの効果があるという。SPW は日本の出来事や行事についての英文1ページを読み、何分で読めるかを自分で計り結果を授業後に先生に報告する。それから教科書に入る。まずフラッシュカードで音を確認してから発音練習を行うが、特徴的なのはそれをジェスチャーを付けて行っているところにある。身体は動作を記憶しているから、言葉を忘れてもジェスチャーが言葉を引き出してくれるという効果があるからだという。本文もまた同じく、まずは両手で教科書を持って音の確認をさせてから、起立をさせてジェスチャー

リーディングをさせる。本文の内容理解は、まず各自で黙読をさせ、内容が理解できた生徒は教室の後ろに行き、他の理解できた生徒とともに内容の確認を行う。分からない生徒が席に残ってしまうという心配があったが、生徒同士教え合いができる雰囲気があった。その後は、生徒が本文を読んだ後に ALT が続けて読むなどの工夫のある音読が続いた。

2 年生の授業では、20 名のクラスで 1 年生からのフォニックスや音読の取組により、r、v、th、l の発音はほぼ全員ができるようになっている。発音力もスピーキング力もともに全国トップレベルのクラスだった。今回は My Project の将来なりたい職業についての発表の準備が行われた。以下が流れである。

(1) (帯活動) Song、→(2) (帯活動)「読みトレ 50」(浜島書店)、→(3)スパイラル学習ワークシート(Sunshine)、→(4)My Project 将来なりたい職業についての発表の準備

1 年生とほぼ同じ帯活動が行われており、生徒も活動に慣れた様子で指示されずに進んで取り組んでいた。教科書に移り、生徒はスパイラル学習シートを使って復習を行っていた。特徴的だったことは自分が書けなかった内容については赤で訂正するのではなく、青で情報を追加していた。書くことが苦手な生徒にとっても間違いを修正するのに恥ずかしくなく、効果的だと感じた。発表は、先生の前で生徒 4 人ほどが順番にリハーサルをし、先生からのコメントを受けてから生徒同士でどのようにしたらもっと良い表現ができるかを協議していた。そのときの先生の問いかけがとても印象的だった。「良かったところと、わからなかったところはどこか」と、理解しづらいところに注目したことだ。英語が得意な生徒は辞書を積極的に活用して台本を作るが、実際に聴くクラスメイトが単語を理解していなかったら、発表が成功したとは言えないからである。生徒同士活発に意見を交わし、発表の質を高め合おうという雰囲気があった。また、リハーサルをする生徒は、1 年生から積み重ねてきたジェスチャーリーディングのおかげで、両手を広げて生き生きと自己表現をしており、発音も正しくとても素晴らしい発表だった。

最後に 3 年生の授業では、12 名の少人数指導を行っていた、ペアシステムを中心に生徒主体のアクティブラーニング型となっている。北原先生の他にもう 1 クラスあるが、どちらも北原メソッドで授業を行い、同じ高い水準の成績を残していると先生は言う。発音力と語彙力が高く、1、2 年生からの積み重ねの効果がうかがえる。例年 3 年生は学校の学芸発表会で英語劇を披露しており、パフォーマンス活動にも積極的な高レベルな作品を作る。授業では今までの学年よりも帯活動に力を入れているようだった。以下が流れである。

(1) (帯活動 1) Song、→(2) (帯活動 2) じゃれマガ、→(3) (帯活動 3)「読みトレ 50」(浜島書店)、(帯活動 4) 日本文化の紹介、→(5) (復習) WPM、→(6) (展開 1) スパイラル学習ワークシート、→(7) (展開 2) Program 7-1 Reading ① Program 6-1 Picture Cards を使った Q&A ② Oral Introduction ③ 新出単語の導入・練習 ④ 本文の内容理解 ⑤ 音読、→(8) (展開 3) Writing

3 年生は流暢さから、正確さを重視した指導がなされていた。帯活動で既習した表現や語を何度も練習することで定着を図り、今度は既習語同士をつなぎ合わせてライティングで自己表現をする。書いたものは毎時間先生や ALT がチェックすることで正確さを上げることができる。授業ノートの他に、さらにライティングノート、Dictation ノートと 3 冊用意して書くことを重視している。

4 感想

各学年ごとに充実した帯活動を行っており、着けさせたい技能により重みづけがされていた。生徒も理解しながら活動に取り組んでいて、先生が述べていた 3 つの「適切」が授業で展開されていた。本校でも全学年を通して「適切」を守った帯活動の充実を図っていききたい。また実際に参観して、とても効果的だと思ったペアシステムを自校化し、練習や発表を磨き高め合う等の協働を通して、生徒一人一人のコミュニケーション能力の基礎を養っていききたい。